【草花の部屋】

ヒマワリ（キク科ヒマワリ属　Helianthus annuus）

和名：ヒマワリ（向日葵）

別名：ニチリンソウ（日輪草)、ヒグルマ（日車)、ヒグルマソウ（日車草)、ヒマワリソウ（日回り草)、ヒュウガアオイ（向日葵)、サンフラワー、ソレイユ

英名：Sunflower

キク目　一年草　　原産地：北アメリカ

花言葉：憧れ、あなただけを見つめる　　花の色：橙、黄、茶、復色

←↓ 写真-１、２ ヒマワリ
～リングオブファイヤー
撮影日：2017 年 07 月 14 日
撮影場所：インターラーケン
（スイス)にて
撮影者：M　さん

インターラーケン(スイス)のヘーエ通りの花壇に咲いていました。ヘーエ通りは、ヘーエマッテの向こうにユングフラウを見る事のできる、美しい通りです。反対側には商

店が並んでいます。
　花は大きな 1 つの花のように見えますが、頭状花序と呼ばれ、実際は多数の花が集まって 1 つの花の形を形成しています。これは、キク科の植物に見られる特徴でもあります。俗に言う花弁の部分は「舌状花(ぜつじょうか)」と呼ばれ雄蕊を持っていません。黒っぽい中心の部分は「筒状花(とうじょうか)」と呼ばれ、こちらは雄と雌の両方の機能を持っており、咲いた後にタネができます。この花びら一枚一枚が独立した一つの花で、中心部分の筒状花も小さな筒状のものひとつひとつが独立した花です。
　和名の由来は、太陽の動きにつれてその方向を追うように花が回るといわれたことからだそうですが、この動きは生長に伴うもので、実際に太陽を追って動くのは生長が盛んな若い時期だけだそうです。
　ヒマワリは作物としても重要な植物で、花の直径が 30cm 以上で草丈が 4m 近くになるロシア(品種名)はタネに 20～30%もの脂肪分が含まれており、ヒマワリ油を採取するために世界で広く栽培されているそうです。かつてはネイティブ・アメリカンの食べものだったそうですが、16 世紀にコロンブスがアメリカ大陸を発見したときにスペインへと持ち込まれ、その後 17 世紀にフランス、ロシアへと伝わったとされているようです。
　種は長卵形でやや平たく、種皮色は油料用品種が黒色で、食用や観賞用品種には長軸方向に黒と白の縞模様があります。油を絞った後のタネは石けんなどの原料に、茎は紙の原材料に、葉は飼料にするなど油以外にも無駄なく利用用途の広い作物のようです。
　野生種で約 60 種確認されており、観賞用だけでなく種から絞り出す油や食用の品種などを全て合わせると 100 以上の種類があるそうです。野生種はさほど大きな花を付けず、現在の大輪のものは品種改良によってつくられたもので、ヒマワリが日本に入ってきたのは 1666 年と言われています